捨て子のひろいもの

渚咲

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この小説はさかっち（@ｓａｋａｔｔｉｌ８）様が作成している、ある物語の設定を使用しています。この小説を読む前に、一度さかっち様の物語を見ておくことをおすすめします。

捨てられた女の子と棄てられた機械の話。※２０２１／１／２７　改

続くかも。

目　次

捨て子のひろいもの ―――― 1

捨て子のひろいもの

《リーナ、起きて。もう起きないと流石に間に合わないよ？》
「分かってる、分かってるよ。あと５分だけ、いやあと３０分だけで良いから寝かせて……」
《リーナは忘れてるかも知れないけど、さっき３０分前に全く同じセリフを呟いて寝ちゃってたよ。録音してたけど聞いてみる？》
「……レーテのそういうとこ、ほんっとにムカつく！」

悪態をつき、嫌々ベットから起き上がった小柄な少女。名をリーナ・ローウェスという。子供のような駄々を捏ねているが、こんな彼女でも一応、お国を守る警官の端くれである。

《ムカつくって言われても本当のことだし。それに、私が起こさなきゃ絶対寝過ごしてたし、むしろ感謝してくれなきゃ》
「そう言われると言い返せなくなるように、時間を上手く調整してるのもムカつく……」

《ふふん。リーナが私に勝とうなんて百年は早いよ!》

そう言って勝ち誇るのは、彼女の持つＭＢＳシステム《レーツェル》だ。警官でありながら、色々と抜けている彼女の世話をしている。今日も今日とてぐーたらなマスターを叩き起し、起きた後の支度を粗方済ませておく。民間化されたこともあり、簡単な家事くらいなら全てＭＢＳが行えるように環境が整えられた。

《全く、リーナは私が居るということの有難みを理解してないよ。こうしてリーナがギリギリに起きても大丈夫な様に、何から何までちゃんと用意してるんだよ?》

「ほんとに!?ありがと、レーテ!」

《うむうむ》

トーストをかじりつつ、彼女は相棒に問いかける。

「ところでレーテ、作戦って何するんだっけ?」

《……忘れてたの?ほんの数時間前に一緒に確認したよね?》

「そうだっけ?ごめんごめん、忘れちゃった」

こんな子が警官でこの国は大丈夫なんだろうか。レーテはそう思わずにはいられなかった。

◇◇◇

政府が義勇軍残党が潜伏していると予想していた地区において、地元の警官達が本当に拠点を発見してしまったこと。その拠点のリーダーは、かの有名なデュスノミアの英雄だと判明していること。その他諸々を説明し、本題を伝える。

《そして私達の仕事だけど、残された敵トラップの解除作業と、生き残った味方の救出だね。直接戦う訳じゃないし、戦闘中ずっと起きてても暇だし。……だから寝てたんじゃ

ないの？》

「そういえばそうでした。ところで、私を起こしたって事は戦闘は終わったの？」

《うん。でも作戦としては失敗なのかな、ジャック・アーロンもアイリッシュも逃がしちゃったみたい。あと、マルティネスっていう衛生兵にも逃げられたって》

「まんまと全員逃げられてるじゃん！大丈夫なの？」

《大丈夫だと思うよ？そもそも今回の戦闘自体、かなり偶発的なものだったらしいし》

「うーん、逃げられてもいいって良くわかんないや」

《リーナは自分の仕事だけやればＯＫ！ってことだよ》

作戦内容の確認を済ませ、二人は戦場跡へ向かう。敵は居ないがトラップは大量という少し歪な場所。そのせいか、優秀でも無能でもない中途半端な者ばかり集められていた。

「なんか拍子抜けだね。元軍人のレジスタンスだって言うから、結構真面目にやってたんだけど」

《いくら軍人って言っても、ヴォルケムートと違ってコープスは穏健派って聞くし。踏んだら即死とか、そんなレベルの物は仕掛けてないと思うよ？》

「なーんだ。爆散！みたいなのを期待してたのに」
《心臓に悪すぎる……》

気の抜けたことを言いながら、人の居なくなった住宅街を歩いていく。

《マスター……誰か、マスターを……》
「ん？なんか言った？」
《私じゃないよ。……この反応は、ＭＢＳ？》

リーナの耳に、誰かが助けを求める声が聞こえた。二人はすぐさま、その声が聞こえた方向に向かう。

「テロリストの死体……？」
《このＭＢＳは、主人が死に、味方にも回収されず、そのまま置いていかれたんだろうね》
「……今の私は警官なんだ。レーテの時のみたいに、この子を拾ってあげられない……」

リーナは、この子を置いていくことに罪悪感を感じている。だがそれは間違いだと、

レーテは思う。見て見ぬふりをするだけ、彼女は優しい方だ。今このＭＢＳを保護すれば、レジスタンスにこちらの情報を渡すことになるかもしれない。

それに本来なら、敵ＭＢＳは署まで持ち帰り、情報を引き出せるだけ引き出し、人格をリセットする事となっている。

人格をリセット……つまり、殺さねばならないのだ。その点、ここで彼女が見なかったことにすれば、もの好きな民間人が拾って保護してくれるかもしれない。

《行こう、リーナ》

「うん……」

すっかり落ち込んでしまったリーナを見て、レーテは昔の事を思い出していた。

◇◇◇

リーナは元々孤児院の出身で、今の両親も本当の親ではなく里親。ローウェスという名前だって、その里親の名前だ。

彼女は自分の居た孤児院の中で少し浮いていた。その理由の一つが、彼女の珍しい容姿。……真っ白な髪と肌に、またまた真っ白な目。いわゆるアルビノと言うやつだ。通常、アルビノと言うのは先天的な物なのだが、彼女のこれは過度なストレスにより色が全て抜け落ちた物、厳密に言うとアルビノとは少し違う。

そして二つ目が、孤児院に来た理由だ。彼女の本当の両親は、彼女がまだ幼い頃に離婚し、その親権は父親に渡った。父親は乱暴な性格で、成長していくにつれ、どんどん顔立ちが母親に似ていく彼女に苛立ち、日常的に暴力を振るっていた。

それを見かねたアパートの大家が児童相談所に通報。駆けつけた職員達がそこで見たのは、あまりに酷いものだった。

汚い部屋、散乱した酒瓶、血が飛び散った壁。……そして、顔が大きく腫れ、身体中痣だらけで、部屋の隅に蹲っている真っ白な少女。彼女は発見後すぐさま病院に搬送され、そのまま孤児院に預けられた。

そんな事があり、彼女は人を信じなくなった。孤児院の職員も、同じような境遇の子

供達をも信じない。他の子とは違う容姿を持ち、誰とも関わろうとはせず、仮面を被っているかのように、その顔は常に無表情。周りから見ればさぞ不気味だろう。必要最低限の会話だけをし、一日を終える。そんな日々を過ごしていた彼女に、文字通り運命を変える出来事が起こる。

◇◇◇

孤児院に預けられてから数年後、リーナ達の居る街の近くで、ロリ義勇軍と熟女好き派による戦闘が起こった。街には避難勧告が出され、孤児院の人々も我先にと逃げ出した。

だが、彼女は避難出来なかった。理由は単純、置いていかれたのだ。避難用の車の数は限られていて、必ず戻ってくると言った大人達は、我が身可愛さに彼女を見捨てた。

そのまま両軍は戦闘を開始。銃声と爆発音が響く中、彼女は震えながら身を隠していた。

２日ほど経っただろうか。戦闘は終了し、両軍は撤退。弱りきった体を動かし外に出てみると、そこにはボロボロの街があった。

――何か食べるものが欲しい。そう思い、クレーターだらけの道を進んでいると、何かの声がした。

《誰か、誰か居ませんか？》

「君は……何？」

そこにあったのは人の死体と一丁の銃、この声はどうやら、死体の持っている銃から聞こえて来ているらしい。

《私はＡＣＷ―Ｒに搭載されたＭＢＳシステムです。貴女は？》

「私はリーナ、ＭＢＳシステムってなに？こんな所で何をしているの？」

《ＭＢＳシステムとは、銃器にプログラムされた戦闘補助システムです。持ち主が死んで放棄されてしまった為、保護を求めています》

「へー、私と同じだね。君も捨てられたんだ」
《状況的にはそうなります。……私と同じ？》
「うん。私も親に捨てられた、孤児院の皆に捨てられた、街の皆に捨てられたの」
《……》
「だからね、凄く困ってる。もしかしなくても、ここで死んじゃうかも知れないんだ」
《……何故そんなに平然としているのですか？人間というものは死を恐れる生き物でしょう？》

ＡＣＷ―Ｒは不思議だった。何故、自分たちとは違い、半永久的な寿命を持たない人間が、それも、こんな年端もいかないような少女が、死が目の前に近づいていると言うのに、これほど冷静で居られるのか。

「だってしょうがないじゃん。私だけじゃ、隣街まで行くのは無理だし。それに、どっちでもいいんだ。生きようが死のうが。……もう、どうでもいいんだ。何もかも」

そう言って、彼女は少し笑った。その暗い笑顔を見た時、ＡＣＷ―Ｒは理解した。彼女は冷静なのでは無い、ただ諦めているのだと。戦場で幾度となく見てきた、生きるこ

とを諦める顔。私達システムがどうしようも無く苦しくなる、あの顔。
それに思い当たった時、ＡＣＷ―Ｒは彼女に一つの提案をした。

《私が居れば、車の運転も、隣街までのルート案内も可能です》
「……助けてくれようとしてるの？でも、ごめんね。私はもう疲れちゃったんだ。本当にどうでも良いんだよ、だから気にしないで」
《私は、貴女に生きて欲しいのです》
「……どうして？君と私は今日あったばかりなのに。それにどうせ、君も私を捨てていく。お母さんや、街の皆と同じようにね」
《――――では、こうしましょう。私が貴女を裏切れば、私は自らのデータを消去し、二度と再起動出来ないようにプログラムを書き換えます。そして、私が貴女を裏切らなければ、貴女の命が尽きるまで、私を傍に置いていて欲しい》
「……それが君に何のメリットがあるの？補助システムとしての本能？私に同情してるつもり？……可哀想だね。こんな時にまで、他人の心配しか出来ないようになってるなんて」
《そうかもしれません。ただのシステムでしかない私には、今抱いているこの感情が、私の本心なのか、それともプログラムされた本能なのか、どちらかは分からない。ですが、

それがどちらにせよ、今はっきりと認識していることが一つあります》
「……それって？」
《――――私は貴女に幸せで居て欲しい。笑っていて欲しい。もう二度と、あのような暗い笑顔をして欲しくは無いと感じています》
「……」

リーナは泣いてしまった。親にすら愛されず、誰からも愛される事のなかった少女は、今初めて、他者の暖かさを知った。同じ言葉を、他の誰かが言ったところで、きっと、彼女は信じる事が出来なかっただろう。それほどまでに、彼女の心は裏切られ続け、冷えきっていた。

だが、その暖かさを初めて彼女に教えたのは、嘘を知らない機械だった。ＡＣＷ―Ｒのその真っ直ぐな言葉が、彼女の心を動かしたのだ。

《何故泣いているのですか？泣かないでください。貴女には泣いていて欲しくない、笑っていて欲しいのです》
「これは、……嬉しくて。嬉しくて泣いてるんだ。君は、私に幸せで欲しいんでしょ？ならもう少しだけ、泣かせていて欲しいな……」

《分かりました。貴女がそれで幸せになってくれるのなら、私は何時間、いえ何日でも待っています。》
「……流石に日は跨がないかなぁ」

◇◇◇

ひとしきり泣き終わった後、彼女とＡＣＷ―Ｒは一つの約束をした。

「――――じゃあ、約束。絶対に私の前から居なくならないで。私をもう一人にしないで。私とずっと、ずっとずっと一緒に居てね。お願い、お願いだよ」
《はい。絶対に貴女を一人にはしません。これから先、貴女の傍を離れることはありません。……約束です、リーナ》

　この瞬間、一人の捨て子と一機の捨て娘の運命は変わった。一人は、自らが捨ててしまった感情を。一機は、新たに生まれてきた感情を拾いあげた。

「……今更なんだけど、君の名前を聞いてもいい？」
《私に名前はありません。リーナが付けてください》
「えぇ!?うーん、何がいいかな～？」
《出来れば、リーナと同じような響きの名前がいいです》
「案外難しいこと言うね。そうだなぁ……あっ！《レーツェル》とかどう？愛称はレーテ！」
《レーツェル。……ドイツ語で謎、どんな意味が？》
「え、意味!?そ、それはほら！響きがカッコイイし、それにかくかくしかじかで」
《特に意味は無いんですね》
「はいそうです。意味なんて無いです、単に響きがカッコイイからそれにしました」
《……まぁいいです。リーナが私に付けてくれた名前ですから、一生大切にします。まぁ、機械なので一生と言うのは語弊があるかもしれないですが》
「ちょっと難しく考えすぎじゃない？……まぁ、それじゃ改めて、これからよろしくね。

レーテ！」
《こちらこそ。……よろしく、リーナ》

◇◇◇

そんなこんなで、私とリーナは出会った。それから二人で隣街まで行き、そこのお人好し夫婦に引き取られた。リーナと私は少しでもこの二人に恩返しがしたくて、この辺りでは一番稼ぎがいいであろう軍警察に就職した。当の二人は、そんなこと気にしなくていいと言っていたけど……そんな訳にも行かず、私達は家を出て、今は寮に入っている。

私が感傷に浸っている間にも、どんどん彼女は落ち込んで行ってしまう。ここで励ましてあげるのが私の仕事。

《そんなに落ち込まなくていい。例え皆がリーナを責めても、私はリーナの傍に居る。ずっとリーナの味方だよ》

「……ありがと、レーテ。おかげで少し楽になったよ。さて、切り替えてお仕事しなくちゃね！」

まだ無理してるけど、少しは元気を出してくれたみたい。彼女は他人に対して必要以上に気を遣う。それは彼女の長所と言えるが、同時に短所とも言える。

「……ここら辺のはこれで終わりかな。ふぃー、今日も疲れたよ」

《疲れたって……私がトラップを見つけて無力化、リーナはそれを回収してただけだよね？》

「実際にレーテを持って動き回ってたのは私だからいいの！レーテは分かんないと思うけど、銃って意外と重いんだよ？」

《それはリーナが普段から筋トレしてないから――》

「あーあー！聞こえない聞こえない！筋肉ムキムキな女の子とか嫌でしょ？そういうの、何でレーテには分かんないかな～」

《だって私にはムキムキになる身体がないし》
「そういうと思ったよ。全く、愛想がないんだから」

やっぱり最後まで気の抜けたことを言いながら、私達は任務を終えた。

――――これから先、今の情勢をひっくり返す大事件が起こることを、彼女たちはまだ知らない。

ｅｎｄ……？